

# 研究ノート 渡邊南岳と菅茶山との交流についての覚書

## ～広島県立歴史博物館所蔵資料から～

久下 実

### はじめに 動機と目的

十八世紀後半から十九世紀初頭に活動した円山派の画家、渡邊南岳については、円山応挙の門下のうち、「応門の十哲」の一人に数えられ、とくに美人画に秀で、江戸に円山派を広めたことで知られる。

しかしながら、この画家は四十七歳で亡くなることから作画期が短く、作品はさほど多くないと見られる。また、この人物の生涯についての詳細な伝記は編まれておらず、既往の南岳の評伝では、江戸時代後期から明治期に編集された画伝書類の記述や、南岳の墓誌の銘文、弟子の回顧談など、彼の没後に作成されたテキストが主な根拠で、南岳の活動期の文献史料はほとんど活用されていない。結果として彼の生涯には不明な点が多い。

これらのことが南岳の画業を検討する上でも足かせとなつていているものと推察される。実際、南岳の評伝に関する先行研究は決して多くはない<sup>①</sup>。

ところで、広島県立歴史博物館には南岳と同時代を生きた漢詩人で儒学者の菅茶山に関する資料が多く所蔵されている。彼の子孫に代々受け継がれた一連の資料は当館に寄贈され、「菅茶山関係資料」として平成二十七年に国重要文化財に指定された。また当館には、菅茶山が着賛した絵画作品など

を購入資料、あるいは寄贈資料として所蔵している。これらの中には、渡邊南岳の作品も含まれるものの、これまであまり紹介される機会がないこともあり、研究者の中で情報が十分に共有されていないと思われる。

そこで、本稿では、館蔵資料のうち、重要文化財菅茶山関係資料中の渡邊南岳に関する記録や作品と、購入資料である渡邊南岳画菅茶山賛「芍薬図」について紹介しつつ、それらから読み取れる二人の交流の様子などにも迫りたい。

### 1 渡邊南岳の評伝について

前述の通り、渡邊南岳や彼の作品を紹介したまとまった伝記や作品集は存在しないようだ。近年の研究成果の中、南岳の評伝をまとめたものでは木村重圭氏「渡邊南岳について」と、杉本欣久氏「館蔵品研究」「鯉図屏風」と画家・渡邊南岳について<sup>②</sup>がある。本稿でもこれらの成果に拠りながら筆を進めるが、その前に各論を概観しておきたい。

まず先行する木村氏の論考(以下、「木村論文」という。)からみていきたい。南岳の略伝を記した最も古い画家名鑑として『画乗要略』(天保二年

(一八三二)刊)の南岳に関する記述を引用し、その後、『古画備考』(嘉永三年(一八四八))など南岳没後の江戸時代後期から明治期にかけての類書の記述を丁寧に取り、南岳に関する情報を整理した。

一方で、同時代資料にも注目しており、南岳の墓誌銘や、南岳が挿絵を担当した当時の刊行物、製作年が判明する肉筆画を紹介し、南岳の画業をたどるとともに、江戸時代に頻繁に開かれていた書画会の目録によって南岳が参加したものを紹介し彼の足跡を明らかにした。そして南岳の晩年に近い文化八年刊の『文化増補 京羽二重大全』に「四条柳馬場東 渡辺南岳」の記述があることを指摘し南岳の居住地を初めて明らかにした。また、南岳の江戸滞在を裏付ける円山応瑞の二通の書簡を紹介し、これらから南岳の江戸滞滞在時期について特定には至らないものの、文化四〇七年頃の三年間と推定した。三年という期間は『古画備考』の記述に沿ったものである。そして、寛政十年(一七九八、南岳三十二歳)から文化八年(一八一二、同四十五歳)までの事績を年代順に整理して記載した。

次に、杉本氏の論考(以下、「杉本論文」という。)を概観したい。

杉本氏は、木村論文にはなかった南岳の弟子中島来章が主宰した「南岳三十三回忌追善書画展覧会」の引き札に来章本人が寄せた文章や、当館所蔵の「祖銭会書画請帖」と題する摺物(後述)を提示するとともに、南岳が挿絵を描いた俳諧の刊行物を広く集めて年代順に一覧にまとめるなどとして、いっそう詳細な南岳の画業や足跡を明らかにしている。

杉本氏は、南岳の江戸滞滞在時期について、文化三年(一八〇六)三月には上方に滞在していること、文化元年(一八〇四)三〇五月には江戸滞滞在が確認できるとして、享和二年(一八〇二)から文化元年までと推定した。また、南

岳と上田秋成との親密な交流にも注目している。

以上の先行研究を基に、南岳の略伝をまとめると次のようになる。

- ・ 明和四年(一七四七)生まれで名は巖、字は維石、通称は小左衛門。
  - ・ まず応門十哲の源琦(一七四七〜九七)に学び、次いで応奉に師事した。
  - ・ 美人画を得意として俳諧の挿絵を多く手がけた。
  - ・ 享和二年から文化元年にかけて江戸に滞滞在し円山派を江戸に伝えた。
  - ・ とくに谷文晁一派と親密で、以後江戸で円山派が盛んになった。
  - ・ この頃交わった人物に谷文晁や酒井抱一、鋏形蕙斎、亀田鵬斎らがいる。
  - ・ 江戸での門人に、谷文晁門下の大西椿年らがいる。
  - ・ 文化三年には京都に戻った形跡がある。
  - ・ 同八年には四条柳馬場東に居住していた。ちなみに近くに呉春や松村景文、奥文鳴が住んでいたことが分かっている。
  - ・ この頃、上田秋成(一七三四〜一八〇九)と親しく交流している。
  - ・ 同十年(一八三二)正月四日に四十七歳で没し、京都双林寺に葬られた。
- ここまで見てきて、木村論文で紹介された年代不詳の円山応瑞書簡を除くと、同時代史料のうち根拠とされているものは、摺物や年代が明らかでない作品に限られ、個人の書状や日記などの記録類は用いられていない。このことはすなわち、そのような文献史料が存在していないか、文献調査が不十分で未発掘である状況を示唆している。

## 2 重要文化財菅茶山関係資料に見える南岳と茶山の交流

本稿の目的のひとつは、広島県立歴史博物館が所蔵する「重要文化財 菅

茶山関係資料」中で確認できる渡辺南岳の情報を紹介することである。そしてそれは、菅茶山と渡辺南岳が交流を持っていた事を示すものである。これまで、茶山と南岳の関係について具体的に言及されることがなかったと思われるので、この点も確認しておきたい。

菅茶山は、四十七歳になった寛政六年(二七九四)三月、妻の宣を連れて神辺を発ち、吉野の桜を愛でた後、飛鳥・奈良に遊んで四月五日に京都に入る。その後九月十三日まで、京都を拠点に多くの知人や文化人たちの詩作・飲酒の交流を深めた。その後、大坂に移動し若き日に交わった旧友たちと再会を果たし、故郷へと戻った。この半年に及ぶ旅の中、とりわけ京都で知遇を得た多くの文化人たちの中には、呉春や蠣崎波響など、その後、終生の交わりをもつ人物も多く、茶山にとつて爽りの多い旅となった。

旅行中の動向は、彼が旅行中に書き留めた三冊から成る「北上日記」に詳しい。茶山の代表的な評伝である富士川氏の『菅茶山』でもこの日記を基に記述されているが、同書では三冊目が所在不明とされており、京都での最後の一か月と大坂の様子については同書では詳しく紹介されなかった。しかし、茶山に関係する資料が広島県立歴史博物館に移され、そこで整理を進める中で「北上日記」の第三冊目を発見、平成二十一年(二〇〇九)の研究紀要で翻刻文と写真が掲載され、その存在が明らかになるとともに、記述内容が公開された。これにより、寛政六年の茶山の旅での動向がいつそう詳らかになった。実際に、「北上日記第三」にも、錚々たる人物たちの名が記されていた。

結論から述べると、南岳の名前は「北上日記」第三に登場する。九月十日の記述に「訪佐野少進、南岳、川相忠蔵(中略)皆告別也(後略)」と記される。四か月にわたった京都滞在の最後、京都を離れる直前に、茶山は世

話になった人々を訪ねて別れを告げたが、その中に南岳も記されている。もう一か所、その半月ほど前の八月二十七日の記述に「訪村上東洲、街上遇奥田南岳」と記されている。道端で偶然、奥田南岳に出会ったという。これが茶山の日記に「南岳」が記された初出であった。

ここで二つの疑問が浮上する。一つは「奥田南岳」は渡辺南岳と同一人物でよいかという疑問。もう一つは、この八月二十七日の記述からは、すでに両者には面識があったことを類推させるが、ならば初対面は何時、どこであったかという疑問である。

最初の疑問を解く上で、鍵となるのが「重要文化財菅茶山関係資料」中の「甲寅画卷」(②)に収録された絵画作品である。

「甲寅画卷」は、寛政六年(干支では甲寅)の旅で茶山が交流を持った画家たちから茶山が入手した絵画作品を中心に十四点を一つの卷子に仕立てたもので、「二十四」という整理番号とみられる墨書が朱書されている。重要文化財指定以前は「画卷二十四」とも呼ばれ、当館の過去の展示会等でもこの名称で展示されていた(③)。「北上日記」にたびたび登場する大原呑響、蠣崎波響、橘南谿、岸駒、村上東洲の他、呉春や応峯の作品も収録され、「南岳写」の落款がある「雀図」は五番目に収められている(写真1a)。南岳の「雀図」も含む冒頭からの十一作品は寛政六年に入手した一連の作品と見て差し支えない(④)。

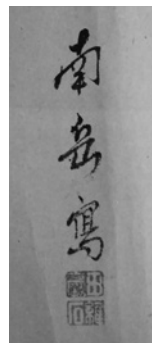
ところで「重要文化財菅茶山関係資料」の目録では「雀図」の作者を「(渡辺)南岳」としている(⑤)。作品の落款印(写真1b)が「田巖」「維石」と読めること、「巖」が渡辺南岳の名で「維石」が字であったことから渡辺南岳と確定したものと見られる。「南岳写」の署名の筆跡も、他の渡辺南

岳の作品と比べ違和感はない。

「雀図」についていくつか述べておけば、これまでの南岳の印で「田巖」は未確認ではないか<sup>⑥</sup>。巖は名であるが「田」は「奥田」の一字ではないだろうか。そして茶山が



上 写真1a  
渡辺南岳画「雀図」  
紙本着色(28.1cm×59.9cm)



右 写真1b  
「雀図」落款

日記に「奥田南岳」と記しているのは、南岳がこの時、渡辺姓ではなく奥田姓を名乗っていたことを示唆している。このことは、先行研究では言及されておらず、注目してよいだろう。茶山は、渡辺南岳ではなく、奥田南岳として知り会ったのである。南岳の奥田姓については、後にもう少し触れたい。

では二番目の疑問はどうだろうか。八月二十七日以前にどこかで茶山は南岳と会っていたはずである。「北上日記」の第一・第二の記述を紹介する富士川氏の『菅茶山』を再度確認すると、奥田南岳という人物の記載は見当たらないが、八月五日に奥田兔毛という人名が記されていることが確認できる。やや長くなるが、この部分の記述を再録しておきたい。ちなみに同書では茶山の日記を原文ではなく書き下しで記述する一方、漢字はあえて旧字体で表記しているが、ここでは現行の新字体に改めて再録する。また、人名や語注は、引用者が適宜( )で補足している。

「五日、双林寺の画会に赴く。路にて春日龜弥太郎に過り(〓立ち寄り)、

植田与斎(〓上田秋成)と値う。さらに高桑闌更に過り、午後、寺に入りて、衆画を歴覧す。悉く記すべからず。席上、皆川翁(〓皆川淇園)字及び画を作り、衆画人、画を作る。宴飲二更に至る。蓋し雅集なり。是の会、余と予め約せし者は蠣崎波響(〓蠣崎波響)、雲卿(〓大原吞響)、織田の数子なり。始めて見たる者は皆川淇園、村上東洲、岸雅楽之介(〓岸駒)……竹亭……関山……南溪、呉月溪(〓呉春)、奥田兔毛、旧識は為岡丹岳、其の余りは皆な面生(〓見知らぬ)の人。席上、諸客に請うて余が懐挟せる袱に画かしむ<sup>⑦</sup>。」

大意は次のようである。(八月)五日、茶山は京都円山の双林寺で催された書画会に参加した。蠣崎波響、大原吞響らと事前に約束があつての参加であつた。ここでは、画家たちの作品が多く飾られてあり、参加者の一人の皆川淇園はその場で書画作品を作り、多くの画家もその場で画を描いていたという。皆川淇園、村上東洲、岸駒、関山、南溪、呉春、奥田兔毛らと初めて会つた。円山派の主要人物が並ぶ。

酒宴を伴う会で、茶山は「雅集」と絶賛した。宴の最中、茶山は懐中の袱を取り出し彼らに絵を所望したという。

「奥田兔毛」に話を戻そう。「兔毛」は柔らかな絵筆の素材であり、奥田は画家と考えられるが、これが奥田南岳なのであろうか。ちなみに茶山の「北上日記」には他に奥田姓の人物は記されない。

結果を先取りすれば、「奥田兔毛」は南岳で良いと見られる。

兵庫県香美町にある大乘寺は、円山応挙とその一門が襖絵や障壁画を製作し、現在、それらが重要文化財に指定されていることで知られるが、同寺に伝わる古文書群(大乘寺文書)に円山派の画家名ら四十二名が記されている



る一点が含まれている。表題はなく「円山派名簿」という仮題で紹介されることもある(8)。作成年代は、寛政六〜七年頃と推定されている。この史料の作成目的は不明ながらも、「円山派の人脈を知ることが出来るたいへん貴重な資料」とされる(9)。「北上日記」に登場する人物名と重複も多く興味深い。ここに南岳の名もある。そして「南岳」と書かれるその右肩に「奥田兔毛」と記されており、この人物は「奥田南岳」、つまり茶山が会ったその人であることが判明する。「雀図」で「田巖」「維石」の落款印とともに「南岳写」と署名した人物が渡邊南岳と見なされるのには見だが、その人物は「奥田南岳」であり、この時期、南岳は「奥田姓」を称していたと見て良い。繰り返しになるが、今回初確認の落款印「田巖」は「奥田巖」から採用したものと解したい。

茶山と南岳の出会いをまとめると次のように推察される。寛政六年八月五日に茶山は画会で南岳と初対面を果たし、他の画家たちと同様、南岳にも画を所望した。これに応え南岳が描いたのが「雀図」であったのだろう。茶山は、この日知り合った「兔毛」と名乗る人物の画号が彼の作品(おそらくは「雀図」)から「南岳」であることを知り、以後の日記(「北上日記」第三)では「奥田兔毛」ではなく「奥田南岳」と記したのではないか。

ここで紹介した大乘寺文書「円山派名簿」は多くの研究者が目にしていないはずであるが、南岳についての言及はなされていないようだ(10)。ここに見える「南岳」が渡邊南岳を指すと強く推測されながらも、それを裏付ける史料が確認されていなかったことが背景にあったのではないかと推察される。しかし、この史料の推定年代と、茶山の「北上日記」や「甲寅画卷」の年代は近接しており、「円山派名簿」が大乘寺の作画に関与した人物を列記するもので

あったなら、南岳もまた、その一人であった可能性も指摘できよう。

次に、もう一つ、菅茶山関係資料から、文化元年の資料を紹介したい。「祖餞会書画請帖」という題を持つ二十五センチ四方の摺物である(11)(写真2)。杉本論文で紹介されたもので、改めてその概要を確認しておきたい。

福山藩の藩儒を務めていた茶山は、文化元年(二八〇四)に、在江戸の藩主阿部正精によって江戸出府を命ぜられ、その年の二月から十月まで江戸に滞在していた。この間、茶山は別に日記を付けていたようだが、その日記は残念ながら現在伝わっていないため、寛政六年の京坂での滞在時のような詳細な足取りを知ることはできない。

一方の渡邊南岳は、杉本氏が明らかにしたように、この時江戸に滞在し、谷文晁や亀田鵬齋らと親交を深めながら円山派の画風を伝えていた。

文化元年の両名をつなぐこの資料は、讃岐の画家二名が江戸滞を終えて帰郷するに当たり、江戸で親交があった人々が餞別として文化元年三月八日に書画会を企画し、それへの参加を呼びかけた案内状であった。おそらく関係者に配付され、当時江戸にいた茶山も入手したものと目される。

この摺物には、企画の発起人と「接伴」(賛同者)が列記されている。賛同者には、文化元年に茶山と親交を深めた鈴木芙蓉(徳島藩御用絵師)、谷文晁、鉤雲泉(白河藩御用絵師)らとともに渡邊南岳も名を連ねていた。

茶山は谷文晁、鈴木芙蓉とも親交が深く、この年の七月に柴野栗山邸で茶山の餞別の宴が開かれた際には、文晁と芙蓉も参加し、両名が宴の様子を描いて茶山に贈っているほどである。また、茶山は白河藩の文化人たちとも親交が深く鉤雲泉とも旧知の仲で、寛政九年(一七九七)六月には鉤雲泉は神

辺に菅茶山を訪問していた。さらに、茶山と雲泉の二人は文化元年六月に隅田川で蠣崎波響らと共に舟遊の宴を楽しんでいる。

この小さな摺物にも墨書で「百人番」と整理番号が付されており、茶山はこの案内状を旅



写真2 祖餞会書画請帖  
左下「接伴」の一人に渡辺南岳を記す。

の思い出の品として持ち帰ったと想像される。「祖餞会書画請帖」に記される面々は、茶山と交流がある者も多く、茶山がこの書画会に足を運んだ可能性に高い。すなわち、そこで寛政六年の初対面以来十年ぶりに南岳と茶山は再会を果たしていた可能性は十分に考えられるのである。ただ、現時点ではこの事実は確認できず、この点については今後の研究の進展を待ちたい。

### 3 広島県立歴史博物館所蔵の渡辺南岳作品について

ここでは渡辺南岳画菅茶山賛「芍薬図」を紹介する(写真3a)。(写真3a)。絹本着色の軸装で、本資料は購入品である。当館では平成八年の第二回収蔵資料展等で公開した。南岳の画に茶山着賛した作品は管見では本作のみであるが、実際のところ、ほとんど存在しないのではないだろうか。

画題のとおり芍薬を描く作品で、落款は「南岳」の署名と「巖之印」「維石」の印が捺される(写真3b)。よく見ると左下の葉に二羽の黄色い蝶が止まっている。茶山がこれを見逃さなかったのは、漢詩からも分かる。

茶山の賛は「維揚三月 / 紅蕖擅春華 / 不知蝴蝶夢 / 更迷何處花」とある。五言絶句の漢詩で署名は「晋帥」。茶山の漢詩集『黄葉夕陽村舍詩』の後編第三卷に「芍薬睡蝶図」と題された漢詩があり、これと比較すると、三句目「蝴蝶」が詩集では「胡蝶」、四句目「更迷」が詩集では「更尋」となっており、字句の異同があるが、同一の漢詩である。「蝴蝶夢」は中国の思想家莊氏の有名な故事である。憶測に過ぎないが、漢詩の冒頭「維」は、茶山が南岳の字「維石」を意識して、意図的に選択したのかも知れない。

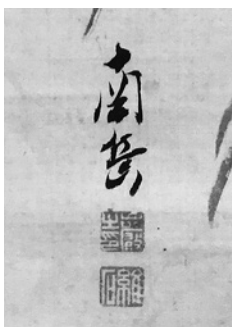
『黄葉夕陽村舍詩』は、ほぼ作成年代順に漢詩が配列されており、本詩は文化八年(一八一二)冬頃とみられる。南岳が亡くなる一年と少し前、ということになる。この時、南岳は京都にいて茶山は神辺にいる。詩題が「芍薬睡蝶図」とあるので南岳の絵が先で漢詩が後とわかる。神辺にいる茶山のもとに南岳の画を届けられたと推測される。

筆者は美術については門外漢であるが、渡辺南岳と言えば一般に、俳諧の



右 写真3a  
渡辺南岳  
菅茶山賛  
「芍薬図」

下 写真3b  
「芍薬図」落款



挿絵で確認できるような軽妙な人物描写の小品のほか、美人図や鯉図に代表される繊細な筆致が特色の画家とされる。草花図では「四季草花絵巻」(東京芸術大学所蔵)が代表作とされる。それに対し、「芍薬図」は、大きな筆さばきを基調とする一方、細かな筆致がみられず、やや違和感がある。

この点に関わって、晩年の南岳について、気になる指摘がある。それは、木村論文で紹介された「晩年失明した」という川端玉章の証言と、杉本論文における、南岳は亡くなる数年前から「寄進する」という意味の「捨下的」印を用いているという指摘である。漢詩が文化八年冬の作品なので「芍薬図」はそれ以前の作画であることが確実だが、本作の筆致の背景には、そのような事情があるのかもしれない。邪推は慎まなければならぬが、仮に眼病を患っていたと考えると、細かな筆致を用いない「芍薬図」の作画期は、茶山の詩作時期と年単位の時間差を想定しなくてもよいのかも知れない。

ただし、杉本論文で提示される、版本資料にみる南岳の落款(署名)の字形の変遷に照らすと、本図の落款は文化初年頃の特徴を示している。ちなみに先述の「四季草花絵巻」の落款もほぼ同じ字形である。これらについては、今後、晩年の南岳の肉筆画を始め、年代が確定できる作例の増加を待つて検討する必要があるだろう。

## おわりに

菅茶山関係資料には茶山宛ての書簡が多く存在するが、渡辺南岳からのものはない。呉春が茶山と初対面となった日は、先述の通り南岳と同じ寛政六年八月五日であった。その後も茶山と長く交流を持った呉春に比べて、南

岳と茶山は特に親交が深かったとは言えない。現状では、菅茶山関係資料中の南岳に関する記述は、管見では「北上日記」の記述以外には知らないが、この資料群のほかの史料、例えば書簡の文面などに、南岳の名が記されている可能性はあり、今後の調査研究の進展を待ちたい。

また、本稿では寛政六年頃、渡辺南岳は奥田姓を名乗り「兎毛」と称したことを確認した。このことは、菅茶山関係資料にとどまらず、同時代の書簡などの諸記録にこのような表記があれば、それは南岳に関する記述である可能性があることを意味する。

そして、本稿で紹介した二点の南岳作品、すなわち「雀図」と「芍薬図」は、ともに年記はないものの、製作年代がほぼ特定できることを確認した。その結果、寛政六年作「雀図」は、現在確認できる南岳の肉筆画としてはおそらく最も古い作例で、南岳の基準作の一つとなり得る作品と言える。また、「芍薬図」は、落款等の検討が必要ではあるが、同じく南岳の最晩年の肉筆の作品の一つである可能性があることを指摘した。

本稿が今後の渡辺南岳の研究の進展に多少とも役立てば幸甚である。

## 【註】

1 杉本論文(参考文献6)の註2に、最近の南学研究として主なものを列記している。木村論文(参考文献2)のほかにも昭和戦前期から平成の初頭までの四本の論考があるが、作品紹介が中心であり、本稿では、杉本氏、木村氏の論考に拠った。

2 重要文化財指定時の資料番号は、菅茶山関係資料 絵画-56

3 参考文献5では「画巻二十四」として解説文とともに応募作品を掲載している。

4 「甲寅画巻」には①維明上人「雪梅図」、②呉春「花図」、③村上東洲「臥読人

物図」、④橘南谿「山水図」、⑤渡辺南岳「雀図」、⑥岸駒「人物休息図」、⑦関山「山水図」、⑧小林亀溪「墨竹図」、⑨紳斎「人物休息図」、⑩大原呑響「山水図」、⑪蠣崎波響「野鴨図」、⑫円山応挙「水面月図」、⑬山玩「山水図」、⑭玉澹「墨竹図」の順で十四作品が収録されている(参考文献8から)。これらの人物の作品中、紳斎、応挙、元玩、玉澹は「北上日記」中、確認できないが、残りの十名は寛政六年の京都で茶山が知遇を得た人物たちである。また、作品中年月日が明示されるのは、⑧亀溪の「甲寅竹酔日(寛政六年五月十三日)」と③東洲の「甲寅仲秋(同年八月)」で、いずれも茶山の京都滞在期間中である。さらに料紙を肉眼で観察したところ南岳作品を含む数点は東洲作品と同じ料紙と思われることから、年記がないながらも南岳作品などは寛政六年のものに見なして差し支えない。

5 参考文献7 七十八ページ。

6 杉本論文(参考文献6)表1に版本に掲載された南岳作品と落款、印がまとめられているが、寛政期のものを含め「田巖」印は見られない。

7 参考文献3 上巻 三五六ページ。なお、富士川氏の著書では言及はないが、当館蔵の原文書の画像で引用か所を確認すると、「・・竹亭」などの「・・」は、各人物の姓について茶山が失念等で記載できなかったため、伏せ字として記号的に用いたものと解される。

8 参考文献9、八十二ページに図版掲載。この史料は、大乗寺のウェブサイト「大乗寺ミュージアム」でも大乗寺文書「書簡(2)」として公開されている(<http://museum.daijyoji.or.jp/en/arrangement/03-06/439301-2b.html>)令和四年十一月十一日最終確認。

9 参考文献9、八十二ページの解説文から。

10 註9と同じ解説文では、この史料に記載される円山派の著名な画家を記載順に

数名列記するが、原在中(史料中十三番目記載)の次に記載がある南岳(同二十一番目)には言及せず、岸駒(同二十六番目)を記す。南岳を記さなかったのは「奥田兎毛」の註記もあり、これが渡辺南岳を指すという裏付けがなかったためと推察される。ちなみに、参考文献7に掲載された表「北上日記第三」人物「覧」でも渡辺南岳は紹介されていない。同様の事情によるものである。

11 重要文化財指定時の資料番号は、菅茶山関係資料 典籍類1261  
なお、参考文献5にも図版と資料解説が掲載されている。

12 本紙寸法は、縦九八・五、横三二・八センチメートル。図版は参考文献4に掲載。

参考文献・資料

- 1 「渡辺南岳先生 四季草花絵巻」(復刻) 大正十年 巧藝社
- 2 木村重圭「渡辺南岳について」(大和文華館『大和文華』第六七号所収)一九八二年
- 3 富士川英郎『菅茶山』一九九〇年 福武書店
- 4 広島県立歴史博物館図録『第二回収蔵資料展』平成八年
- 5 広島県立歴史博物館展示図録『菅茶山の世界Ⅱ』平成十年
- 6 杉本欣久氏「館蔵品研究」(鯉図屏風)と画家・渡辺南岳について  
(黒川古文化研究所紀要『古文化研究』第七号所収)平成二〇年
- 7 岡野将士 翻刻協力古文书整理ボランティア「資料紹介」北上日記第三  
(『広島県立歴史博物館研究紀要』第十一号所収)平成二十二年
- 8 『広島県立歴史博物館資料目録八 重要文化財「菅茶山関係資料」指定品目録』平成二十八年
- 9 平井啓修、古田亮ほか編『円山応挙から近代京都画壇へ』二〇一九年